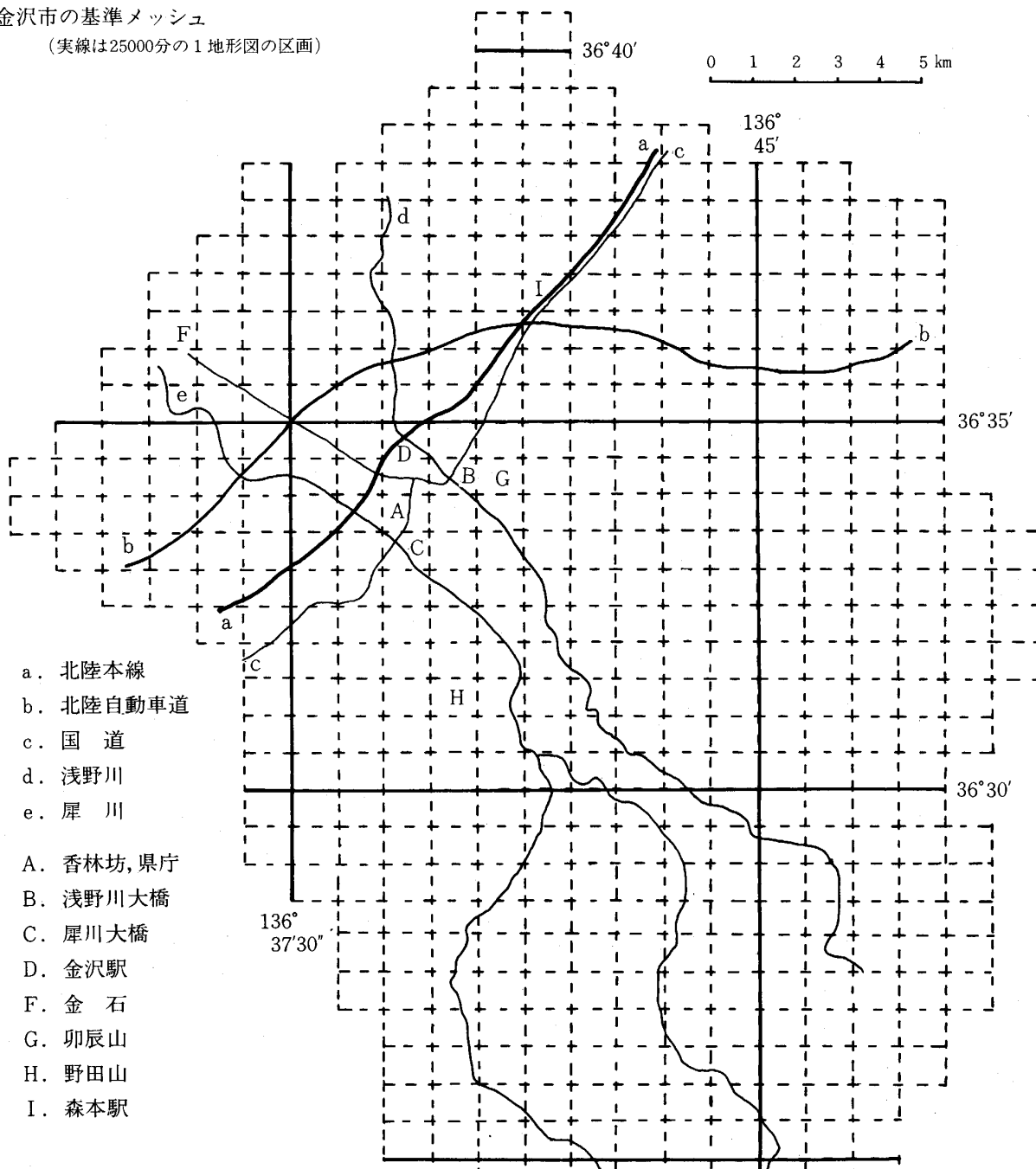


資料 金沢市の人口と事業所のメッシュ地図

次ページ以下の分布図は、「金沢市のメッシュ統計」(金沢市調査統計課)をもとに、地理学実習の一部として各学生が作成したものである。ここで用いた基準メッシュ(行政管理庁告示に基づく)は、国土地理院の二万五千分の一地形図の各図幅の区画を、経線方向および緯線方向に10等分したもので、1メッシュは、南北(緯度30秒)925m(全国同一)と東西(経度45秒)1,120m(金沢市あたりの場合)の長方形(1.04km²)である。金沢市域に限れば、メッシュは等形・等積とみなしてよいから、メッシュの統計値はそのまま面積あたりの密度である。ただし、海岸線・隣接市町村界にあり、金沢市域が全てを占めていないメッシュは、そのメッシュのうちの市域面積の占める割合で該当する市域分の統計値を除いた数値により階級を分類した。(梶川 勇作)

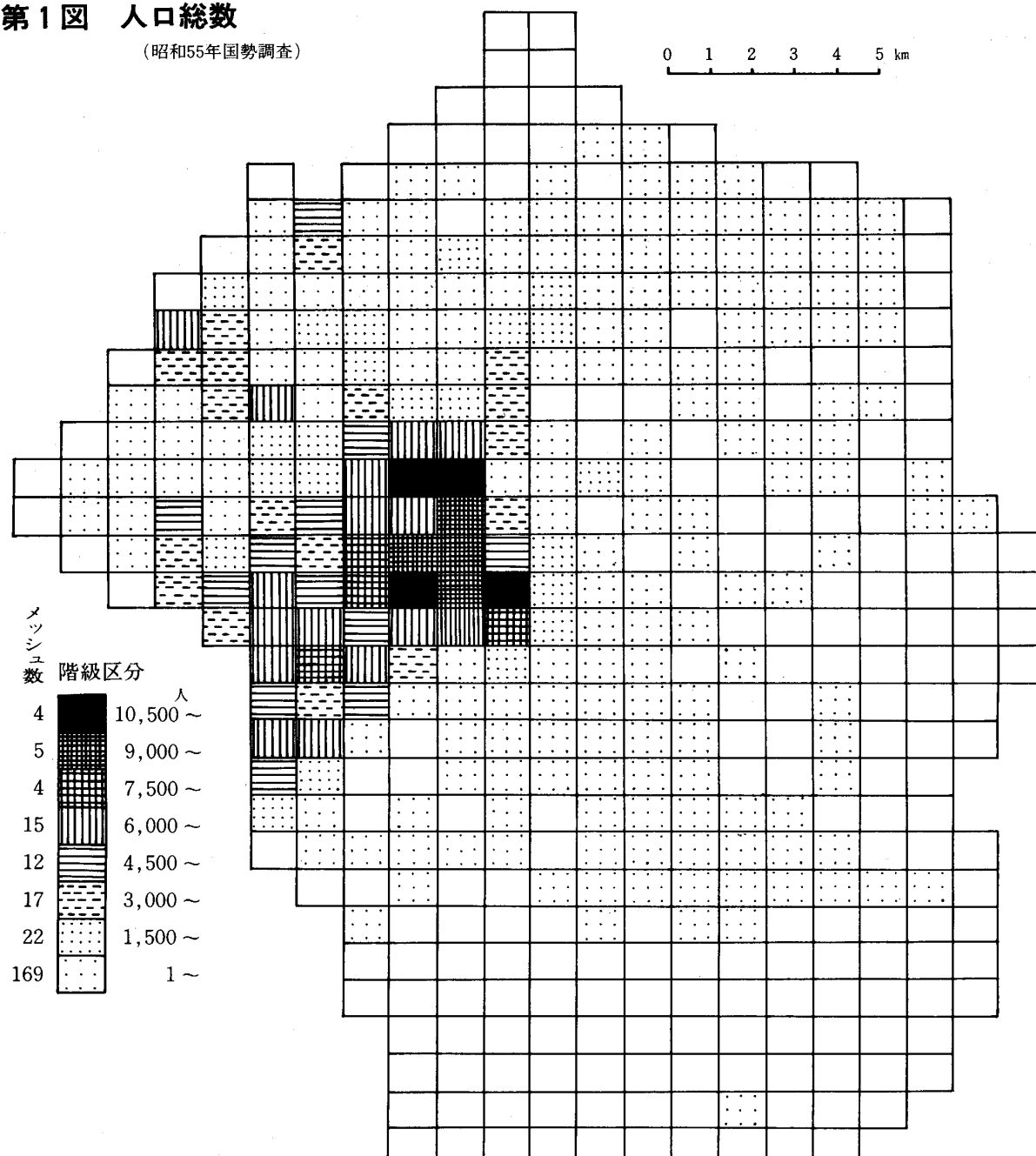
金沢市の基準メッシュ

(実線は25000分の1地形図の区画)



第1図 人口総数

(昭和55年国勢調査)

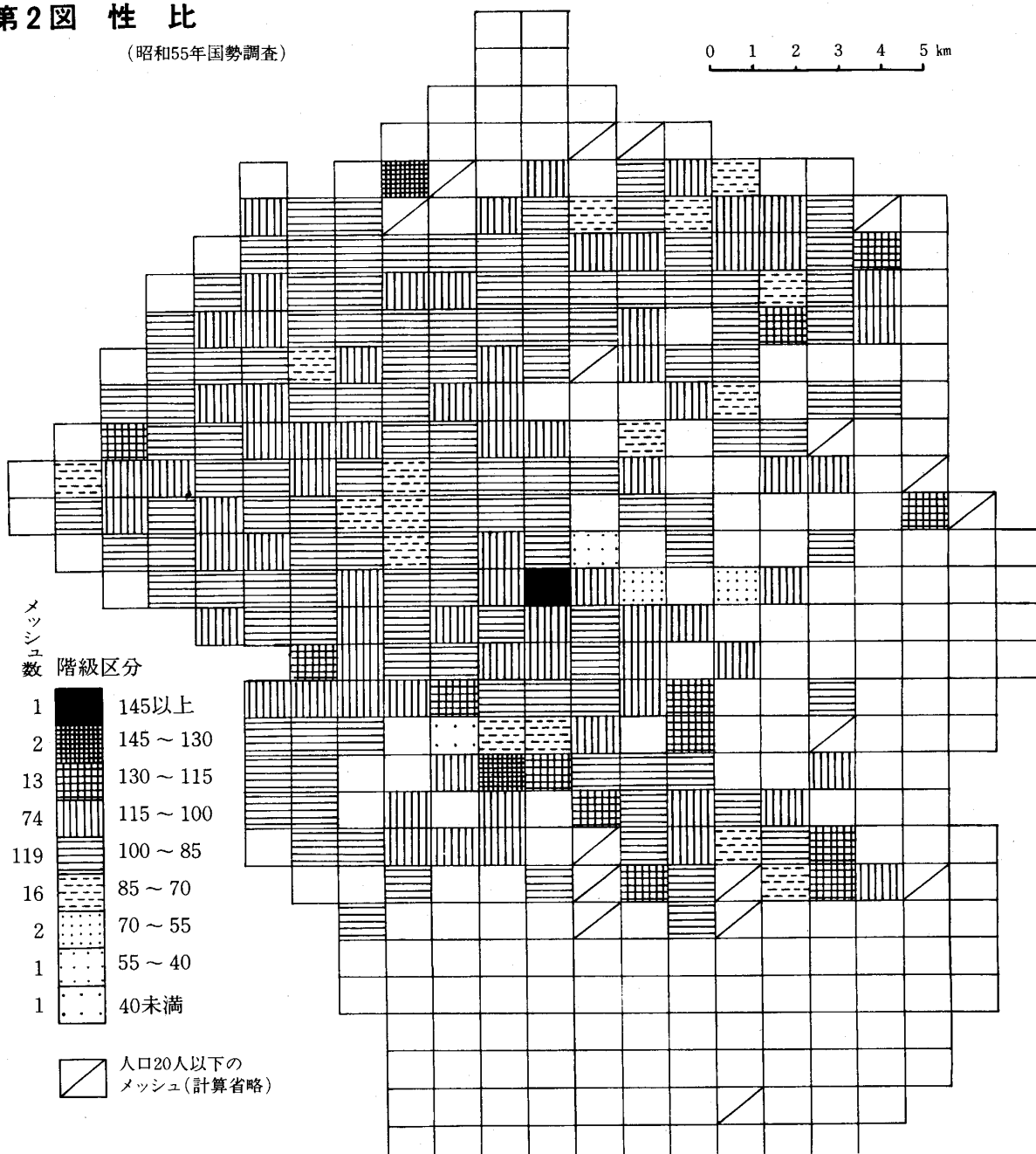


市の総人口417,684人を、人口1人以上のメッシュ数247で割ると、1,691人となる。全体的には、人口は地域の北西部分の平野に集中し、南部・東部の山地・丘陵地、北部の河北潟の部分は人口が希薄である。山間部では、人口は河川に沿って分布している。最も人口の多いのは、浅野川大橋を中心としたメッシュで、その人口は12,813人である。ドーナツ化現象は明確ではないが、市街地の南東側にみとめられる。市の中心の北西方向に伸びる金石街道と、北東方向に伸びる北陸本線に沿って、人口の比較的多いメッシュが続いている。郊外住宅団地（木越・山王・栗崎など）を含むメッシュはやや人口が多い。市の東部には卯辰丘陵があるため人口は急減するが、南西方向へは徐々にしか減少せず、野々市町へと続く。

(池田 紀子)

第2図 性 比

(昭和55年国勢調査)

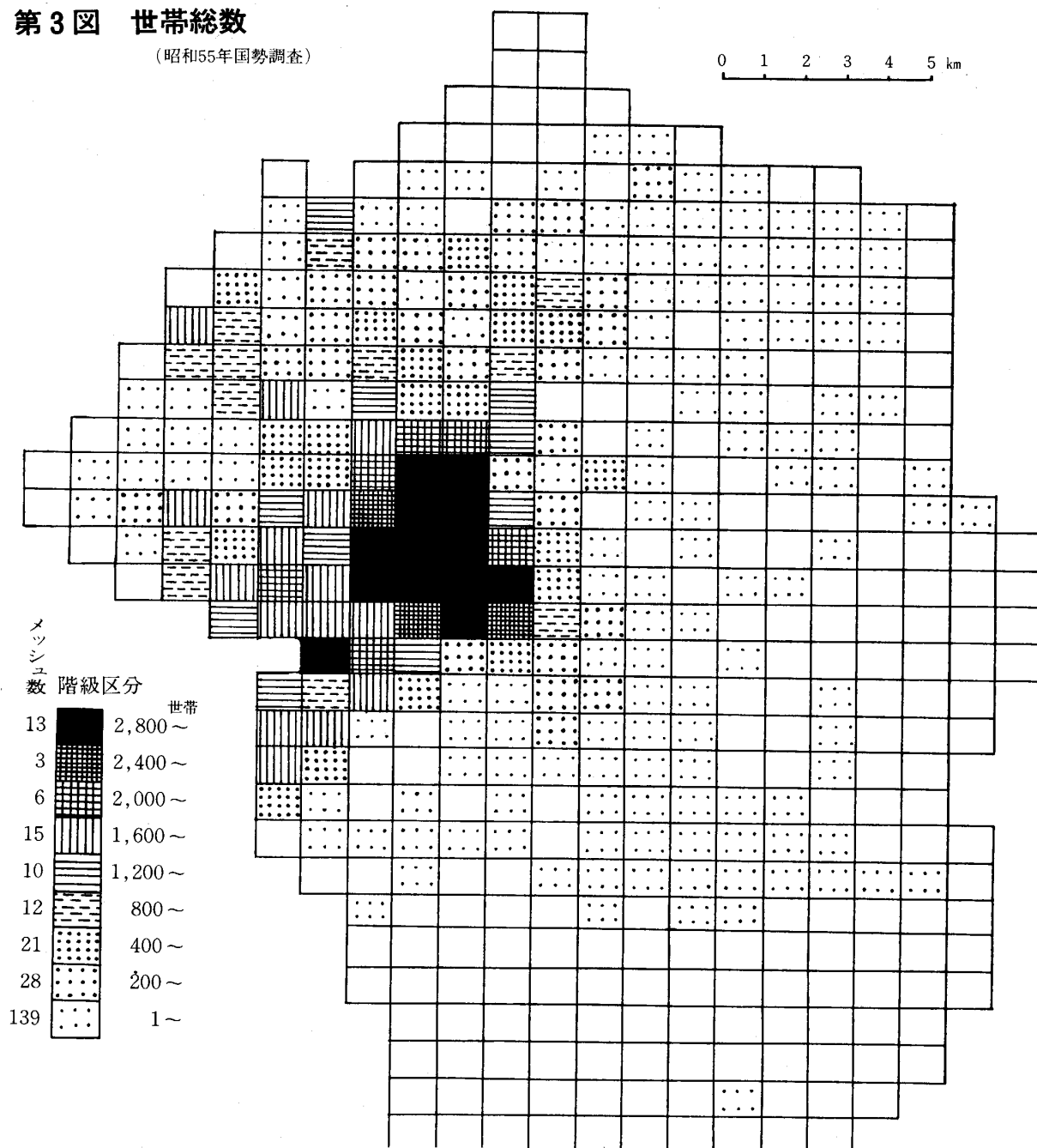


性比は女性100人に対する男性の人口である。市の性比は95.7であり、ちなみに全国では96.9、石川県では94.1である。市全体について性比の階級の頻度分布をみると、中位の階級(性比85~115)のメッシュが全体の8割以上を占めている。それゆえ、性比に大きな偏りはみられないといえる。ただし、性比100未満のメッシュ数が60%と、女性の比率がやや高くなっている。ことに都心部に当たる4つのメッシュでは周囲より性比が低く、都市の中心部の特徴を示している。男女比に極端な偏りのある地区は少ない。その中で、性比が158と高い値を示すメッシュは刑務所の所在と関連がある。北陸学院短大(女子大)とその寮のある地区では、性比が32と低い。その他にも極端な値のメッシュがあるが、その偏りの原因は明らかではない。ただし、人口数の少ない地域では、一般に男女比率が偏りやすいようである。

(上楽 妙子)

第3図 世帯総数

(昭和55年国勢調査)

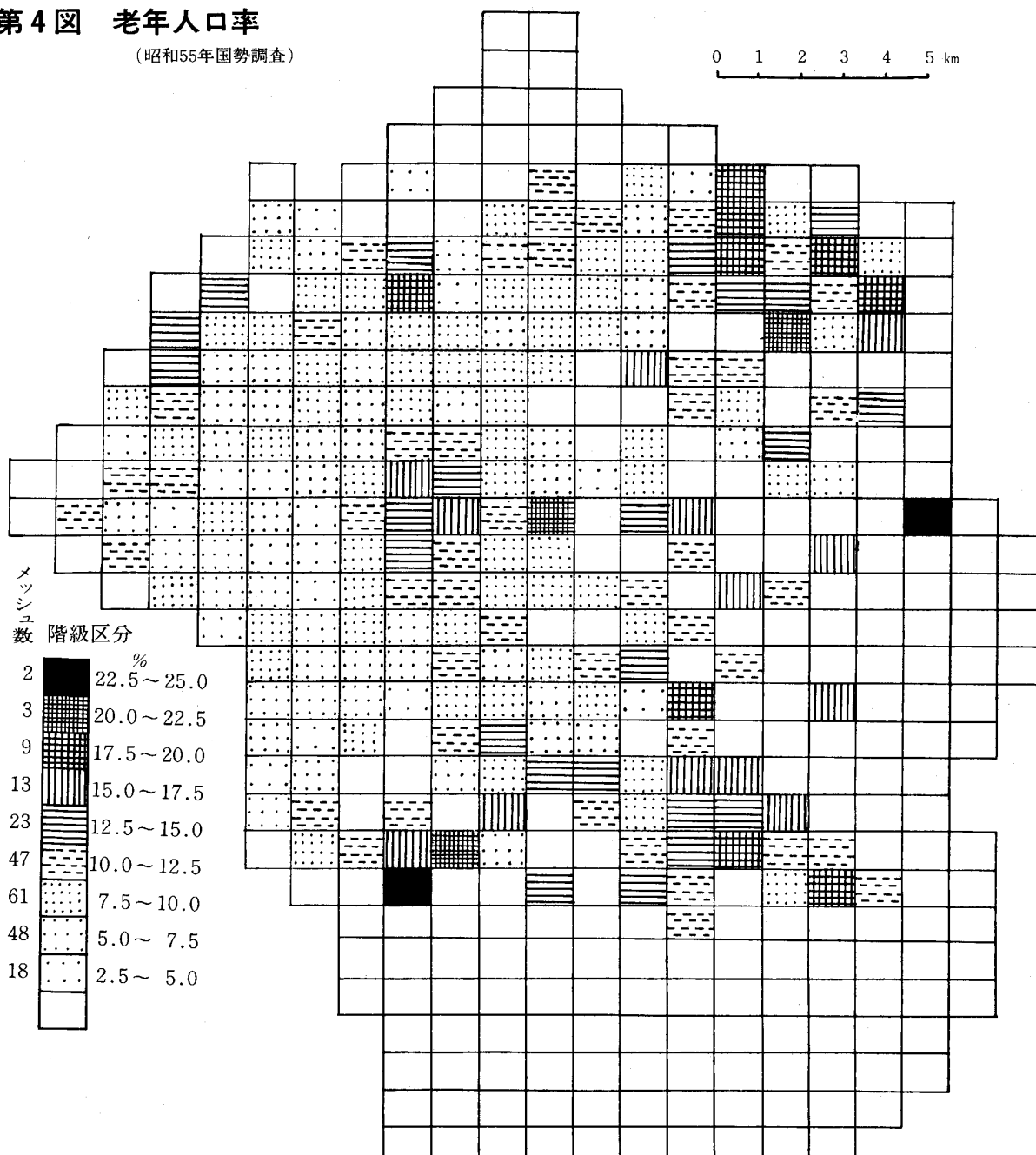


全体的傾向として、居住地区は香林坊・片町付近を中心として、金石・森本・小立野・野々市の4方向に分布する。とくに野々市方向の世帯密度は高い。これら4方向にはそれぞれ主要道が延びている。小立野地区の世帯密度が高いのは、下宿学生が多いことによる。香林坊・広坂などの中央業務地区は、隣接する周辺地区に比べてやや世帯数は少ないが、郊外よりもはるかに多く、最上位階級に属し、隣接地区との相異は、図ではみとめられない。これは、このメッシュ網の粗さにもよるが、金沢市の中央業務地区の狭小さを物語っていると考えられる。東方・南方は山間部であるため、その方向における世帯数の減少は、北部・西部のそれに比べて急激である。とくに市域の最南部には全く住居はない。しかし山間部においても、犀川・浅野川・金腐川など河川沿いには、世帯数は少ないが、居住地区が広範囲にわたり分布する。

(小田島範和)

第4図 老年人口率

(昭和55年国勢調査)

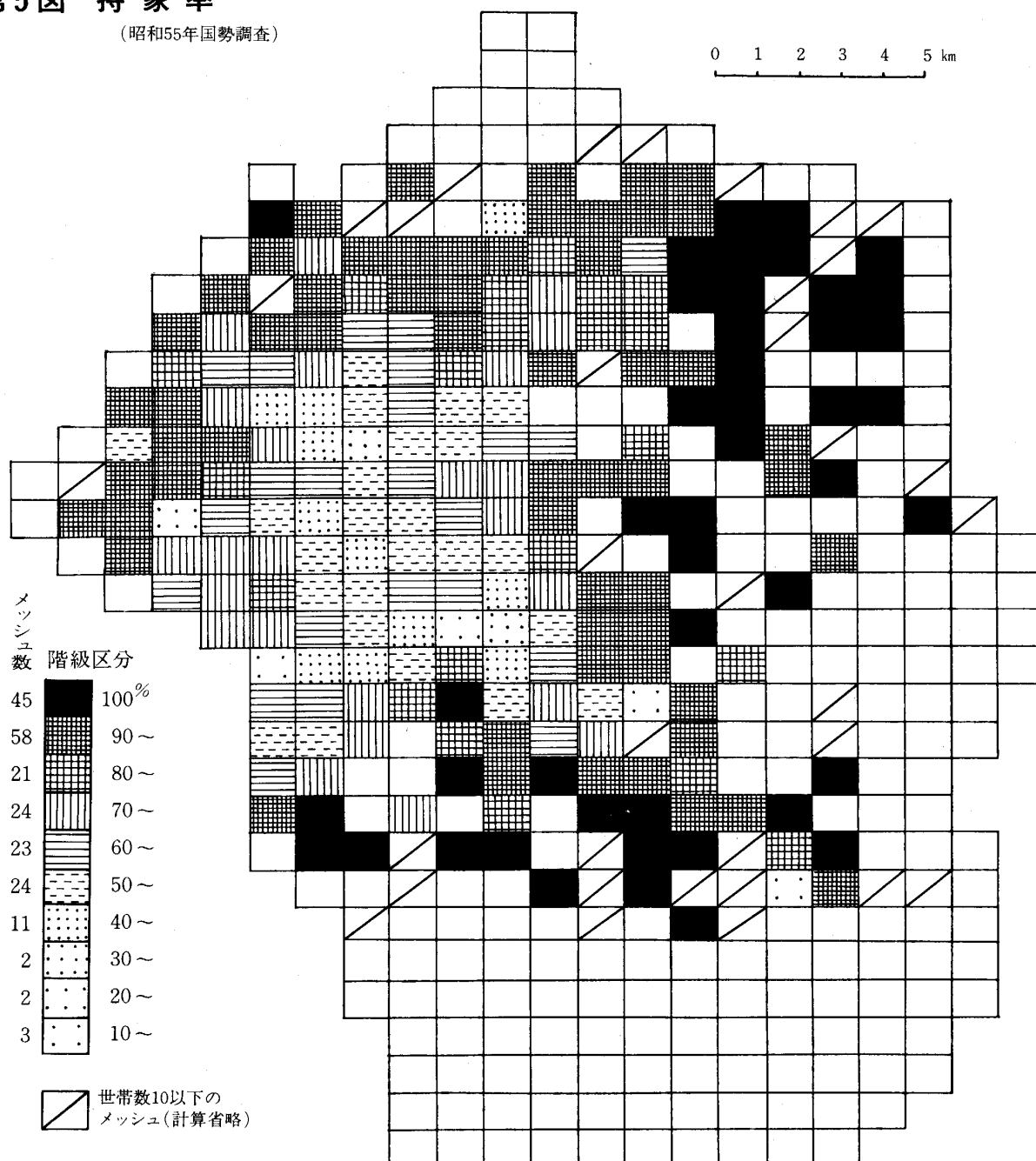


老年（65歳以上）人口率の分布の全体的な特徴をあげると、東高西低の傾向がある。南部も高い。これは市東部および南部が山間部であるため農家が多く、若年層が都市部に流出し、老年層が残るためであろう。細かく見ると、南西部の鶴来町近くの山間部と、東方の福光町に近い山間部に特に高いメッシュがあり、東部の山間部は全体的に高い。これらは過疎化の進行地区であろう。他方、武蔵、兼六園周辺の旧市街の中心地で高いのは、若い世代が郊外の新興住宅地に流出し、老年世代が残ったためと考えられる。また、北寺など平野部郊外の農村集落も高い。一方、低い地区は一般に市西部に広がっている。これは海岸部と野々市町方面に向かって新興住宅地が^{ぬか}発展しているためで、みどり団地、木越住宅、米丸住宅、光が丘、額住宅などを含むメッシュである。将来、これら新興住宅地の老年人口率がどう変化するか興味深い。

(竹原 裕美)

第5図 持家率

(昭和55年国勢調査)

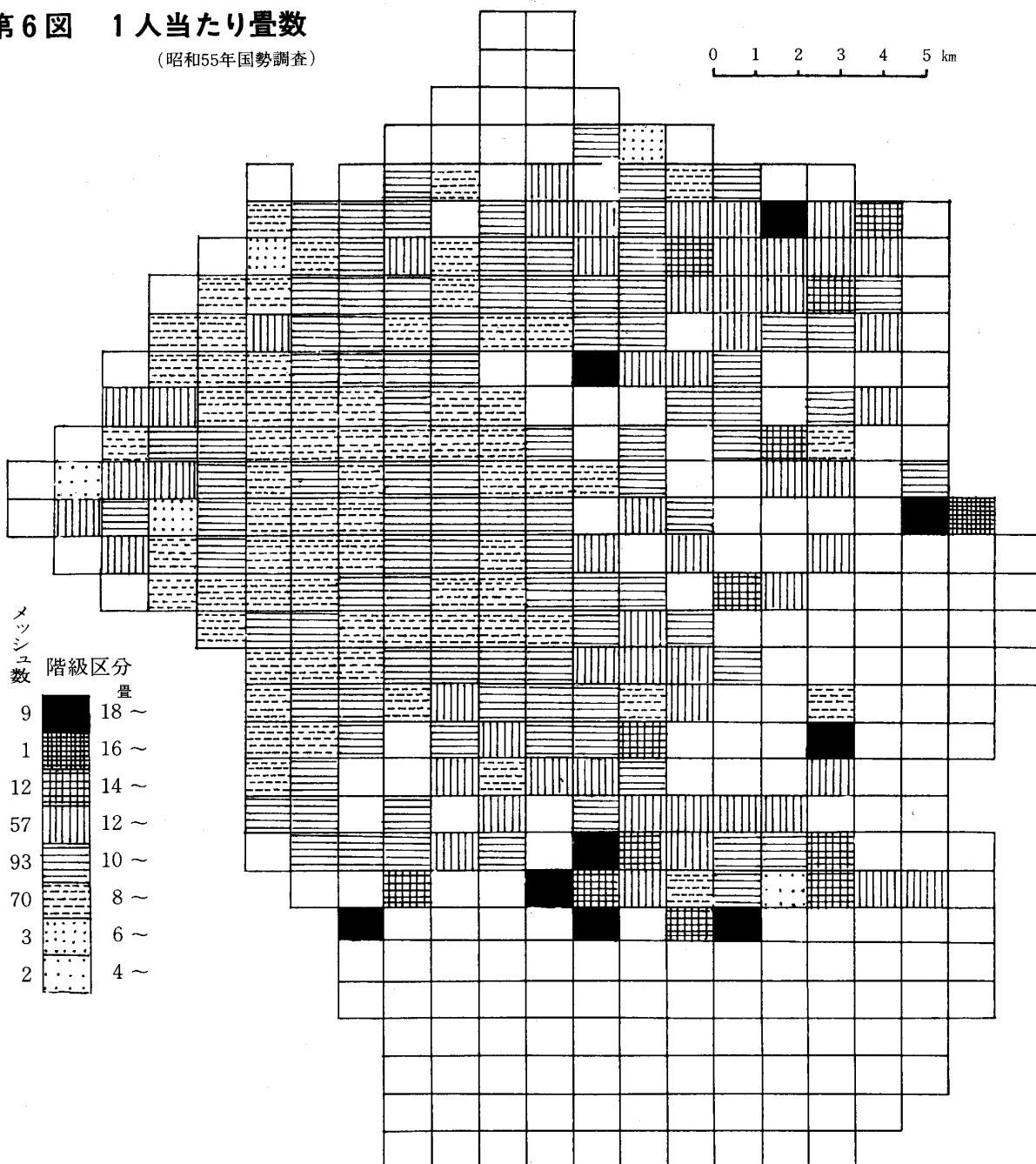


持家率は、各メッシュごとに、持家世帯数を世帯総数で割って求めた。全体的に、持家率の低いのは、市の中心部とそこから金石・森本・平和町・野々市の四方向に広がる地域であり、高いところは周辺部である。前者は人口・住宅の密集地域で、借家・間借りが多いが、後者は農家や郊外の一戸建ての持家などが多いからである。また前者は、概して地価が高く、後者と比較して住宅を持つのが困難であることが影響している。周囲に比べて、持家率の著しく低いメッシュがいくつかみられるが、これらは、みどり団地・平和町住宅団地・大桑団地・広岡町国鉄宿舎・湯涌温泉などを含んだものである。市全体の持家率が62%であるのに対して、持家率90%以上のメッシュが半数近くを占めているのは、世帯総数の少ない郊外のメッシュにおいて一般に持家率が高いことに起因している。なお、持家率は石川県で74%、全国では61%である。

(三井 克己)

第6図 1人当たり畳数

(昭和55年国勢調査)

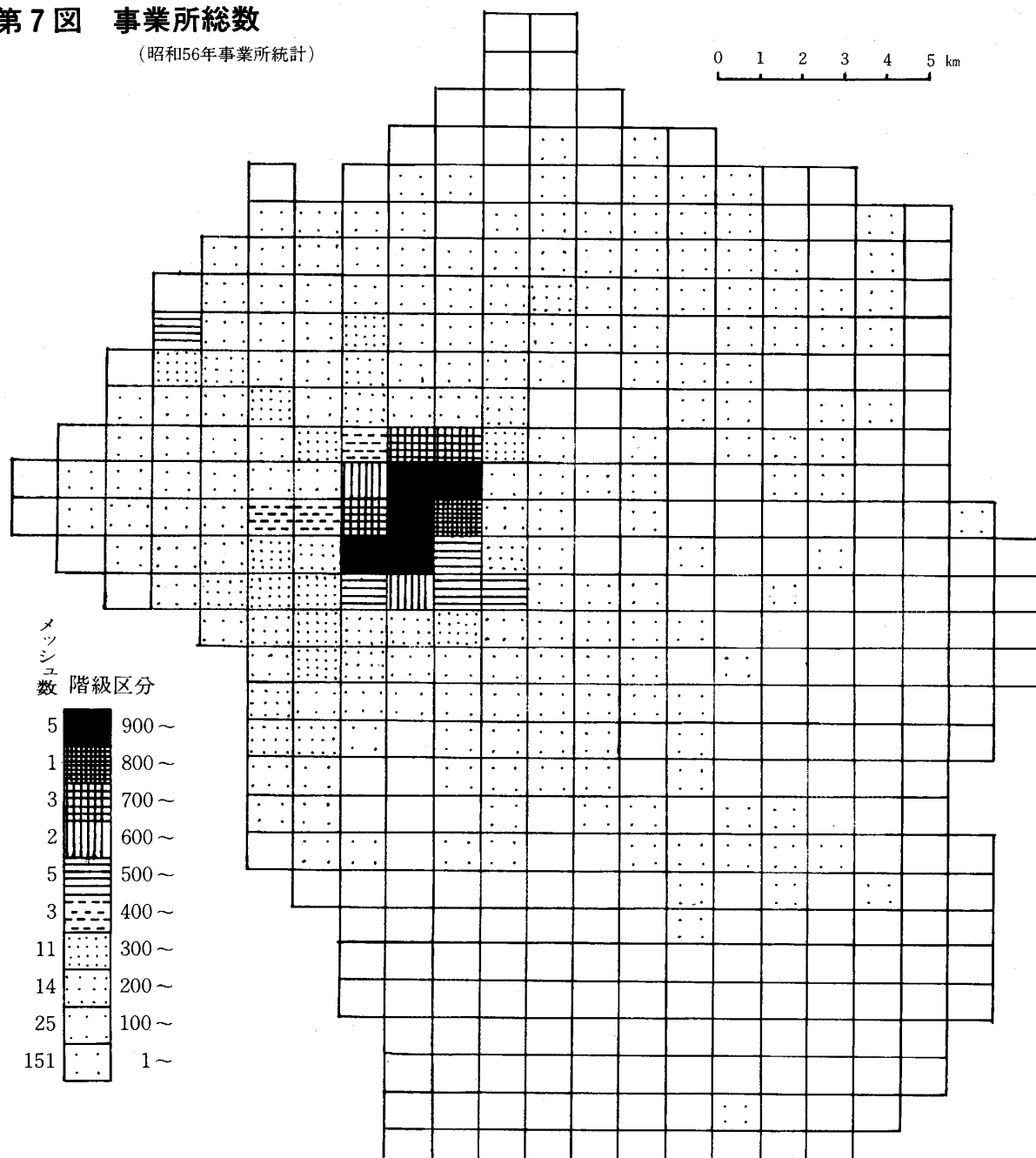


市全体では1人当たりの平均畳数は9.9畳であり、その付近の階級が全体の89.1%を占める。市の中心部は全てが中央の3つの階級（8～14畳）に含まれる。北東・南東の周辺部は一般に畳数が多い。畳数の特に多い地区は、農家がほとんどで、世帯数も少ない。持家率の高いメッシュと畳数の多いメッシュは必ずしも同じではないが、持家率の低いメッシュと畳数の少ないメッシュは一致し、周辺部でも、北西・南西部の国道等主要道路沿いは、いくらか畳数が少ない。これらの傾向の原因の1つに、地価との関係が考えられる。しかし、1人当たりの畳数の多い地区は、単に地価との関係の他に、1世帯当たりの人数が少ないということも影響していると思われる。なお、1人当たり畳数は居住室の広さを示すもので、洋間なども3.3㎡当たり2畳の割合で畳数に換算されている。玄関・便所・浴室・廊下や営業用の室は含まない。石川県の値は11.5畳、全国では8.4畳である。

(大西 正人)

第7図 事業所総数

(昭和56年事業所統計)

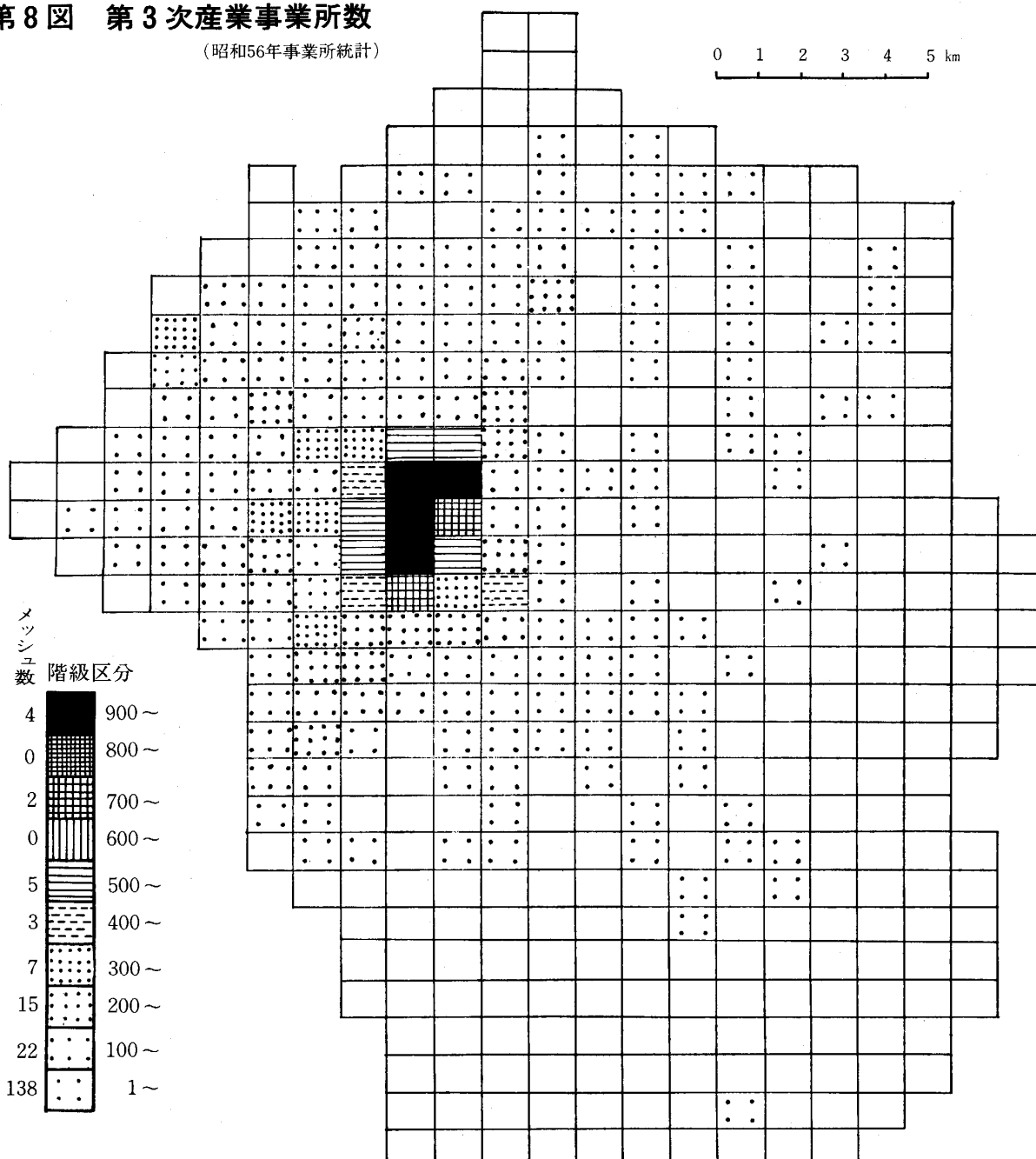


市の事業所総数は31,326である。その分布を大きく次の4つに分類して概観する。(1)事業所数900以上のメッシュは北陸鉄道石川総線の起点野町駅のある野町(犀川左岸)から、片町・香林坊・武蔵町・橋場町を経て東山(浅野川右岸)までの地区で、市内の主要幹線の国道159号線がここを貫いている。なお犀川大橋を含むメッシュが3,167で最高。(2)500～900のメッシュは市街地とほぼ範囲が一致し、(1)の地区のほぼ両側に分布する。藩制時代金沢の外港として盛えた金石(旧宮腰)地区も含む。(3)200～500のメッシュは、(2)をとりまくが、野田山・卯辰山両丘陵に達しない平野部で、海岸側はおおむね北陸自動車道で区切られる。例外としては、金石周辺とそれに至る金石街道沿い、森本の一部、意図的に郊外に集団立地をした問屋センター・木工センター・安原工業団地などを含む地区がある。(4)100未満のメッシュは河北潟を除く平野部全体に広がり、さらに諸河川沿いに山あいにも分布する。

(山田 淳)

第8図 第3次産業事業所数

(昭和56年事業所統計)

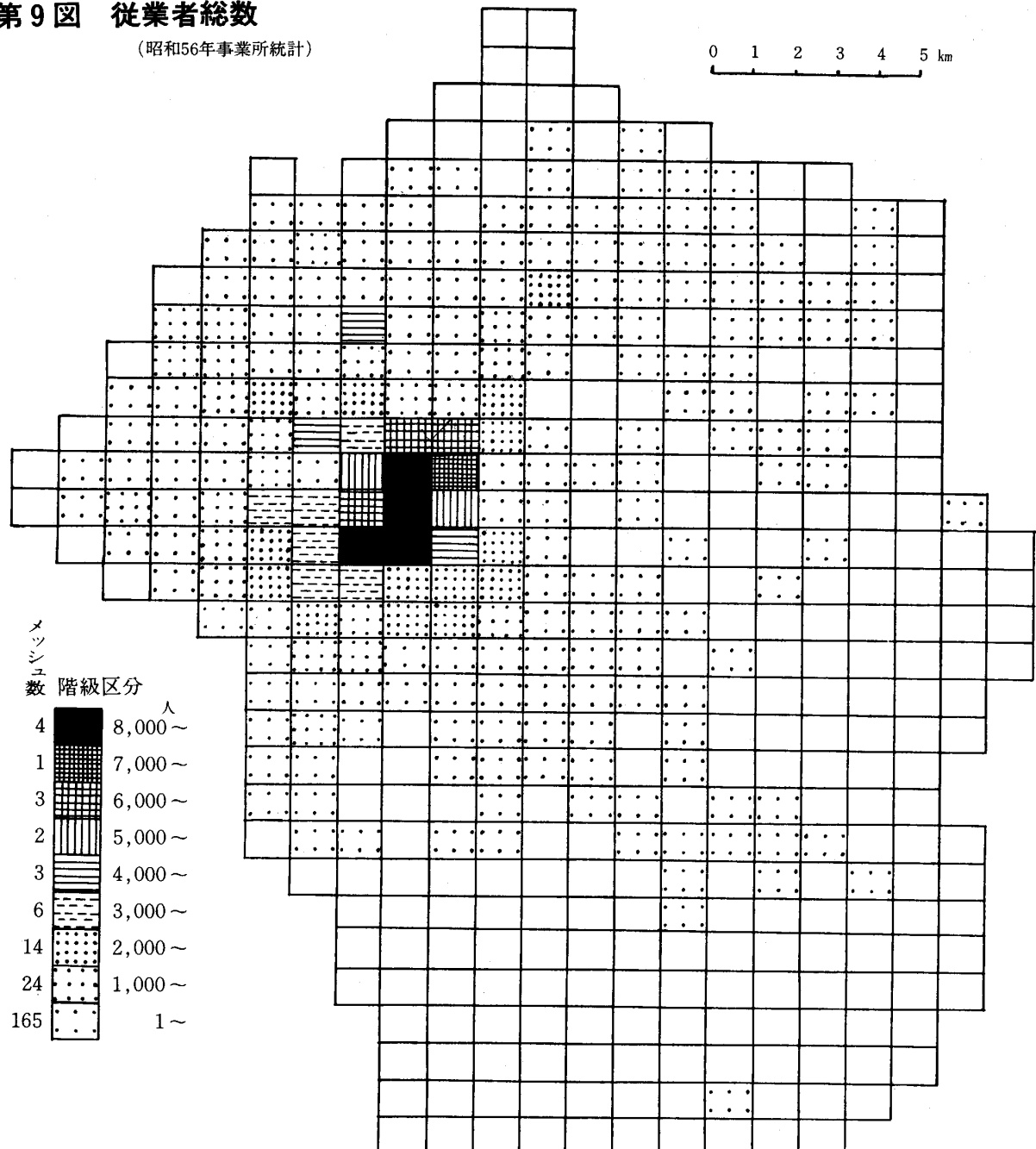


第3次産業事業所の総数は24,652事業所で、その41%が上位6メッシュに含まれている。これは中心部に高いメッシュが集中し、周辺部に低いメッシュが広く分布するからである。分布は交通機関と地形に左右されていると思われる。丘陵地が東部と南東部への分布を限定している。交通機関によっては、北陸本線の森本・西金沢駅付近が周辺部に対してやや高くなっている。また、金石・大野・栗崎付近は、港湾起源の歴史のある町のためいくらか高く、金石街道・旧国道8号線沿いも相対的に高くなっている。人為的に立地した例として、問屋町への卸問屋の集中、食肉センターが移転した八田町が挙げられる。周辺部の低いメッシュは事業所として小売店が多いと思われる。事業所数が群を抜いているのは、飲食店数が多い片町付近と、官公庁・銀行などが多い武蔵ヶ辻・香林坊付近である。しかし両者の性格の差異はこの図では表われない。

(藤田 和久)

第9図 従業者総数

(昭和56年事業所統計)

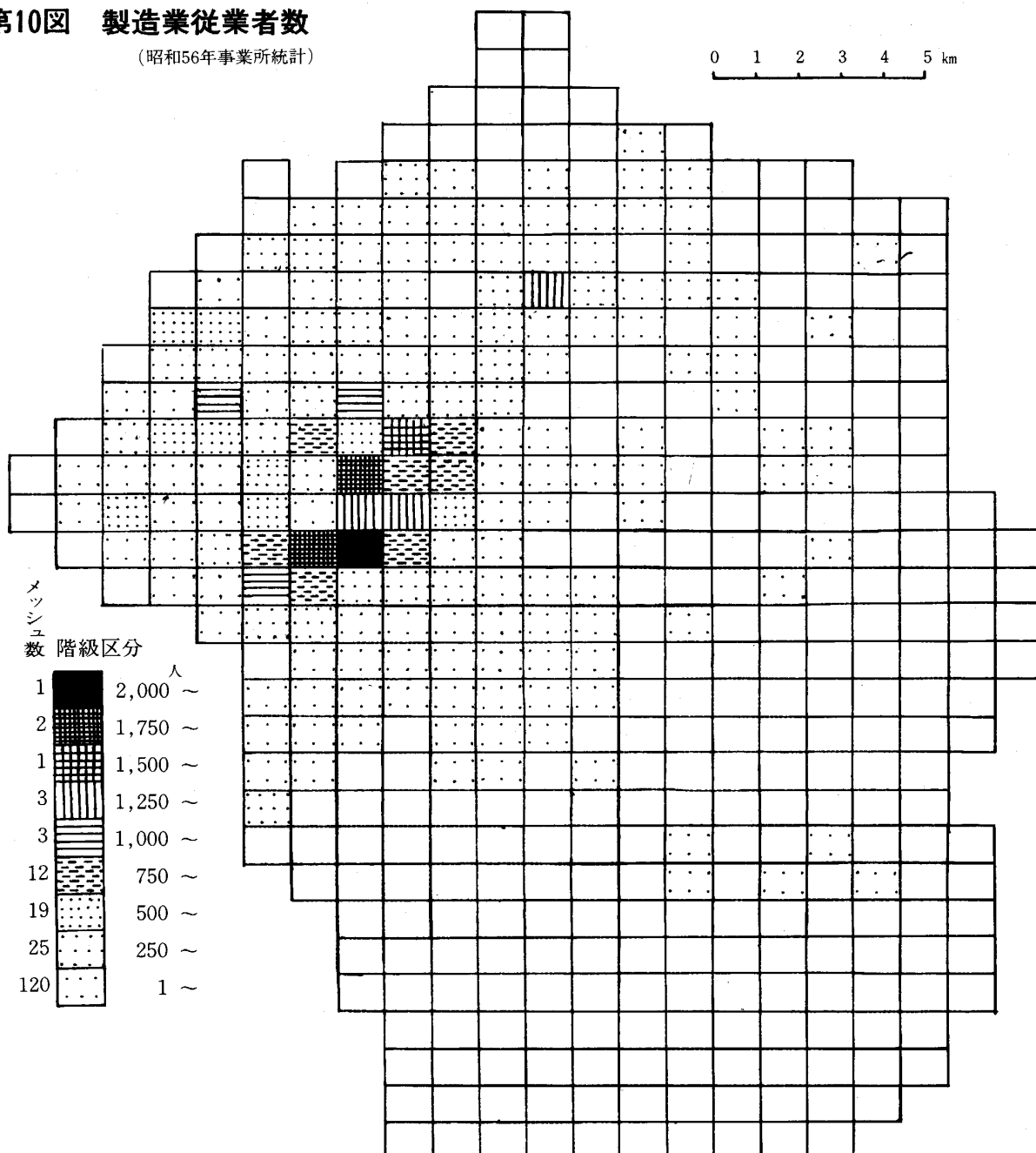


従業者総数1,000人未満の最低階級のメッシュ数が圧倒的に多く、一定の地域への集中がみられる。つまり、武蔵ヶ辻・香林坊などの市の中心部に極度に集中し、逆に周辺部では大部分が最低階級、または従業者のいないメッシュでしめられている。交通の便がよい国道8号線・金石街道などの幹線道路沿いは、企業・工場が進出しているため従業者総数も多い。これらの幹線道路に沿っては、中心部から周辺にかけて、一般に徐々に減少しているが、中心部の東など、その他の地域では、急激な減少がみられる。北東部の国道8号線沿いで、やや多いメッシュは森本駅付近である。ここにはI製作所の大工場などがあるからである。北部では、問屋団地を含むメッシュにおいて多くの従業者がみられる。北西部の栗崎木工センターと西部の安原工業団地を含むメッシュもやや多い。

(山岸 正治)

第10図 製造業従業者数

(昭和56年事業所統計)

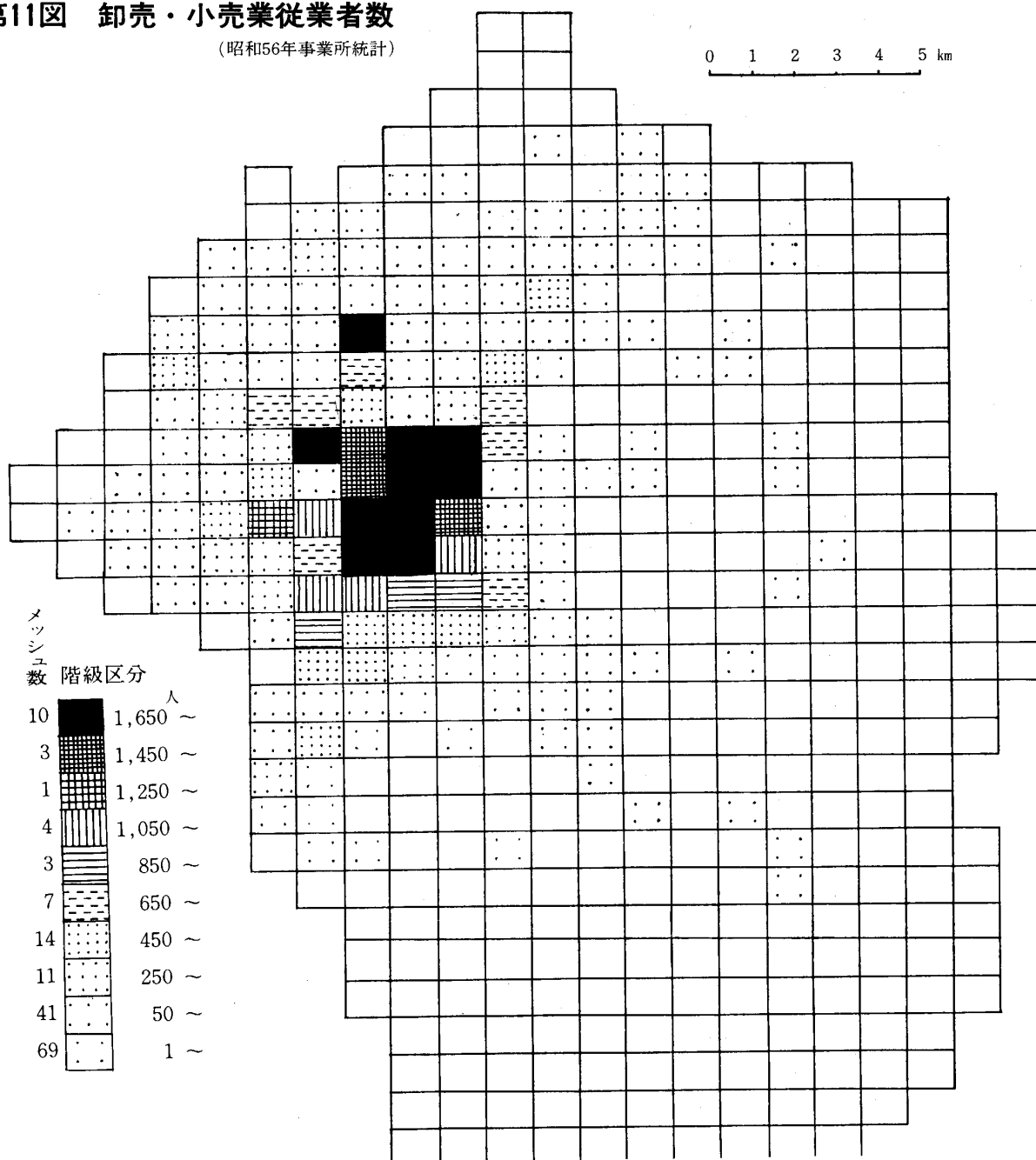


市内の製造業はかなり局地的である。特に市中心部の西半分に極めて多数の従業者が集中しているのは、大手の繊維機械工場・繊維工場が立地しているためである。一方、市中心部の東半分にも従業者がかなり多いが、ここには中小企業が密集している。また国鉄森本駅と西金沢駅の周辺も従業者が比較的多く、全体として工業地域を中心部から北東と南西方向に伸ばしている。これらの駅前地域は、地価負担能力の大きい大手繊維機械工場や日本専売公社工場などによって占められている。さらに工業地域は、中心部から北西部の核・金石の方へと伸びている。金石は古くから港湾機能と醸造業を中心として発展してきた町である。都心部—金石間には、加賀友禅染色団地がある。なお西部に飛び地的に従業者の比較的多い地域がある。ここには鉄工業を中心とする安原工業団地が立地している。

(渡辺 千里)

第11図 卸売・小売業従業者数

(昭和56年事業所統計)



小売・卸売業従業者数の分布傾向として、都心部への集中があげられる。周辺部、特に山側では、従業者数が少なく、市域の大部分が250人以下のメッシュである。つまり、250～1,500人の地区が非常に少ない。北部の一地区だけ飛び抜けて多いところは、問屋団地があるためである。駅西地区は、都心に近いが、開発の遅れを示して低分布になっている。兼六園、美術館など名勝・文化施設が集中している地区は、都心でもやや少ない。宅地化のすすんでいる西南部の円光寺・光ヶ丘方面は、他の周辺部に比べてやや多く、開発の方向が表れている。明確ではないが、金石街道、野田・専光寺線などの主要道路沿いや、森本駅・西金沢駅周辺など交通の要地で高い。図ではわからないが、1万人前後の極端に高い分布を示す地区が、犀川大橋付近と武蔵町・近江町付近の2つに分かれており、商業の中心が2つあることを示している。

(橋 洋平)